



今月の先生

岐阜市民病院

中田 琢巳氏

乳腺外科部長・外来化学療法室長

平成3年岐阜大学医学部卒。平成16年より岐阜市民病院。乳腺外科勤務。日本外科学会専門医、日本乳癌学会専門医。

## 働くあなたのクリニック

早期発見で早期治療  
乳がん

今回は、女性特有のがんで最も多く、増加傾向にある乳がんについて専門医に伺いました。

乳癌とはどんな病気ですか？

乳癌は乳腺組織に発生した癌のことです。正常な乳腺組織はおおまかに母乳をつくる腺房と母乳を乳頭へ導く乳管（腺管）で構成されています。乳癌の多くは腺管の上皮細胞が増殖するという形で発生し、乳管癌と呼ばれます。また、腺房が集まったものを小葉といいますが、小葉から発生する癌も10%ほどあり小葉癌と呼ばれています。

乳管が発達しているのは主に女性であり乳癌もほとんどが女性に発症しますが、男性も乳癌を発症することもあります。その比率は女性100人に対して男性1人程度とされています。日本では一年間の罹患数が5万695人で、年間に女性10万人あたり約61人がかかることになり、女性がかかる癌の中では最も多いものです。乳癌による死亡数は1万721人で、日本においては罹患数・死亡数とも年々増加傾向にあります。

（罹患数・死亡数は2005年の地域がん登録全国推計によるがん罹患データより）

これらのうち1〜5は女性ホルモンであるエストロゲンが関係しています。乳癌の多くはエストロゲンがなければ成長できないタイプのものが占めています。月経の期間中はたくさん作られるため、乳腺もそれだけエストロゲンにさらされます。また、更年期障害の治療でホルモン補充療法を受けている人もエストロゲンを補充しているため乳腺がエストロゲンにさらされる期間が長くなり乳癌にかかりやすくなります。

社会的な階層が高いことと肥満は、社会的な階層が低いよりも高い方が、やせている人より太っている人の方が脂肪の摂取量が多いからです。脂肪摂取量は乳癌と関係ないという報告もありますが、閉経して卵巣機能が衰えた後、エストロゲンは脂肪組織で供給されますので閉経前でも危険因子と考えるのが良いのではないのでしょうか。既往歴としての乳癌疾患については乳癌の一部には乳癌との関連が指摘されているものもあり、乳癌の経験がある人は注意が必要です。また、乳癌の経験者が再び乳癌になる確率は乳癌未経験者の5倍といわれています。

乳癌の症状にはどんなものがありますか？

乳癌の自覚症状があつて乳腺外科を受診する方の症状はしこりです。その他には乳頭から分泌物がでたり、しこりが皮膚表面の近いところにあると皮膚や乳頭がひっぱられてくぼんだり、赤く腫れたりすることがあります。さらに進むと脇の下が腫れたり腕がむくんだりといった症状が出ることもあります。

乳癌にかかりやすいのはどんな人ですか？

- 乳癌の危険因子とされているものは
- 1 初潮が早い
  - 2 閉経が遅い
  - 3 出産未経験
  - 4 初産が遅い
  - 5 長期間ホルモン補充療法の受診者
  - 6 社会的な階層が高い（高学歴）
  - 7 肥満
  - 8 家族に乳癌の人がいる
  - 9 良性の乳腺疾患の既往
  - 10 片側が乳癌になった などです。

乳癌を予防するにはどうしたらいいのでしょうか？

残念ながら乳癌を予防する方法は今のところありません。前述した危険因子に当てはまらない人でも乳癌にかかることはあります。したがって、乳癌で命を落とすことがないようにするには早期発見・治療が大切になってきます。そのためには定期的に乳癌検診を受けることが重要です。

乳癌検診ではどんな検査をするのですか？

現在の乳癌検診の国際標準は、マンモグラフィー検診です。欧米諸国ではマンモグラフィー検診を導入した結果、1990年代から乳癌の死亡率が下降に転じています。日本でも以前の乳癌検診は視診・触診が中心でしたが最近ではマンモグラフィーもしくは超音波を使用した検診が行われるようになりました。

しかし、まだまだ受診率が低いのが課題となっています。受診率をどう上げるかが今後の課題とされています。